TOPICS 1

トピックス…①

輸入に依存するEU食料システムの脆弱性

EUは世界の主要農産物生産国であり、一般的には、食料の入手可能性にリスクがあるとは見なされていない。しかし、食料の価格上昇とそれに伴う市場の混乱によって、EUの食料システムが、限られた数の第三国の生産者から供給される一部の輸入財に大きく依存しているという事実が明らかになった。このことは、食料の多くを輸入に依存するわが国にとっても、見逃すことのできない問題である。

１．問題の背景

欧州連合（EU：European Union）の農業貿易収支はプラスであるが、一部の主要産品は輸入に依存している。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックとロシアのウクライナ侵攻に続く最近の世界市場の混乱は、農業、食品製造業、食品流通業、消費者等からなる食料システムの強靭な回復力と食料安全保障を犠牲にして、経済効率を追求することのリスクを浮き彫りにした。事実、この影響はEUの食料生産部門の価格、サプライチェーン、物流にも及んでいる。

このような背景から、欧州議会（European Parliament）は、2022年３月24日の「ロシアのウクライナ侵攻を踏まえ、EU内外の食料安全保障を確保するための緊急EU行動計画の必要性」に関する決議において、「EUの食料システムにおける輸入財とその供給源への依存に関する包括的な調査」（The dependency of the EU's food system on inputs and their sources）を実施する意向を表明した。また、欧州委員会（European Commission）は、2022年の「EU農業の食料安全保障と長期的な強靭性の確保」に関する独自の報告書で、EUが第三国からの輸入への依存を減らし、肥料、家畜飼料とその原材料などの重要な輸入財の供給を多様化することにより、食料安全保障と農業部門およびサプライチェーン全体の強靭性を強化する必要性を強調している。

２．輸入に関する脆弱性

価値ベースの輸入財に対する全セクターの依存度（輸入財価格/部門別総生産高）は、EUの食料システムの中核的構成部門（農業部門、漁業・水産養殖部門、食品・飲料部門）で概して10％未満である。農業部門では、この比率は7.7％である。

しかし 、食料システムのこれら3つの中核的構成部門が使用する総投入量に占める割合として表すと、投入財の輸入への依存度が高く、大豆など一部の投入財の輸入依存度（輸入投入量/総投入量）が著しく高い。例えば、農業部門への輸入投入財は11.06％から66.71％の範囲である。上位４つの供給国のシェアを集計した割合で測定した輸入材の地理的集中度も同様で、集計レベルでは比較的低い（上位４か国の供給国の合計シェアは2019年に40％未満）が、個々の投入材では非常に高いものがある。例えば、大豆（ブラジル、米国）と大豆ミール（ブラジル、アルゼンチン）は、上位２か国の市場シェアが85％に達する（表１参照）。

輸入への依存は、動物性食品に関わる穀物などで顕著であり、穀物に関しては、飼料の生産に必要な原材料とエネルギー源として輸入に依存している。大豆と大豆ミールは、特に養鶏業や養豚業にとって極めて重要な飼料原料であるが、その輸入はEU域外の少数の供給国への最も強い依存を特徴としている。

最近の動向は、EUの食品サプライチェーンのグローバルサプライチェーンへの統合の度合いを反映してお

表１　飼料用蛋白質原料の輸入依存度と輸入先別の占める割合

品　目	使用用途	輸入依存度	輸入先別割合	
大豆	家畜飼料 大豆油原料 大豆かす原料	84％	ブラジル 米国 その他	50％ 35％ 15％
大豆かす	飼料原料	97％	ブラジル アルゼンチン その他	46％ 39％ 15％

資料：欧州議会 “The dependency of the EU's food system on inputs and their sources”
注１）輸入依存度＝輸入量／EU総使用量、2022/2023年度の数量ベース
　２）輸入先別割合は、2022年の数量ベースのシェア

り、EUの産業と同様に、COVID-19のパンデミック、ロシアのウクライナ侵攻、物流の混乱（特に海上輸送）とそれに伴う価格変動の高まりなど、グローバルサプライチェーンに関連する分野横断的なリスクが、主要な投入財に対する輸入依存度の高さという負の影響を増幅させている。

３．主要農産物の輸入生産資材への依存

前述のように、動物性食品（牛肉、豚肉、家禽肉、牛乳、乳製品）については、タンパク質が豊富な飼料原料、特に大豆（84％）と大豆かす（97％）の輸入依存度が深刻である（表１参照）。家畜の全ての種が、タンパク質が豊富な輸入飼料原料に同程度依存しているわけではない。反芻動物（ウシ、ヒツジ、ヤギ）の飼養におけるタンパク質の必要量は、飼料成分によってさまざまな程度で自給されているが（特に、タンパク質がかなり豊富なマメ科作物が含まれている場合）、単胃動物（ブタや家禽）は、タンパク質の必要量を満たすために製造された飼料に主に依存している。タンパク質が豊富な大豆と大豆かすは、製造された飼料の重要な構成要素である。表２は、家畜飼料用タンパク質作物のEUでの自給率を示している。

家畜飼料における大豆製品の重要性の高さは、主にそれらの高いタンパク質含有量とアミノ酸に関するそれらの最適な組成（いわゆる「アミノ酸プロファイル」）に関連している。しかも、家畜飼料で大豆製品を代替する可能性も種によって異なり、反芻動物は一般的に単胃動物よりも柔軟性がある。

４．輸入依存度を下げるために利用可能な手段

EUの対外貿易はGDPの30％を占めており、貿易障壁に直面してもEUの強靭性が損なわれないよう、貿易促進を支援することに大きな関心が寄せられている。特に市場の開放性は、対外貿易の強靭性を向上させ、限られた数の貿易相手国への過度の依存によるリスクや脆弱性を回避するための鍵である。

EUの貿易政策、自由貿易協定、第三国との戦略的パートナーシップは、特にEUが輸入に依存している主要製品について、EU域外からの多様なアクセスを容易にする。関税制度は貿易の流れを円滑にし、EUの農家の生産資材（タンパク質が豊富な飼料や肥料など）へのアクセスを改善するための重要なツールである。

しかし、欧州グリーンディールの下で策定された最近の政策により、農業と食料システムの持続可能性に対する関心が高まっている。EUの気候変動に対する関心の高さは、特にEUの肥料産業と、改正された再生可能エネルギー指令（RED）、排出量取引制度（ETS）、炭素国境調整メカニズム（CBAM）を通じて、輸入された生産資材の需要に影響を及ぼす可能性がある。

「農場から食卓まで戦略」（The Farm to Fork Strategy）の目標は、栄養素の損失の50％削減（肥料使用量の20％削減）、有機生産農地を25％にすること、EUタンパク質戦略の枠組内での家畜飼料用代替タンパク質の開発、バイオエコノミーの促進とサプライチェーンの短縮などを通じて、2030年までのEU農業生産の自律に貢献することを目指している。

また、共通農業政策（CAP：Common Agricultural Policy）の国家戦略計画は、特に低投入の慣行農法や栄養管理、持続可能な肥料の確保や有機農業への支援、および加盟国がタンパク質作物への支援を強化する可能性を通じて、EUの輸入依存を減らす可能性も備えている。しかし、EUおよび加盟国レベルで最近採択された緊急措置は、ウクライナ紛争後の投入コスト上昇の影響を緩和するのに有用であることが証明されているが、複数の関係者が強調しているように、EUグリーンディールとCAPの下での持続可能な慣行農法の採用は、EUの農業生産力を低下させ、それによってEUの食料自給率を低めるリスクもあると言われている。

表２　EUの家畜飼料用タンパク質の自給率

品　目	蛋白質含有率（％）	飼料総使用量（百万トン）	EU産原料の使用量（百万トン）	自給率（％）
大豆かす	45.5	27.1	0.9	3
菜種かす	33.0	12.0	8.3	69
小麦	11.0	38.2	36.2	95
大麦	10.0	35.6	35.6	100
トウモロコシ	8.0	63.5	50.4	79
マメ科飼料作物	7.2	84.0	84.0	100
コーンサイレージ	2.9	244.0	244.0	100
牧草	2.6	629.0	629.0	100

資料：欧州議会 “The dependency of the EU’s food system on inputs and their sources”
注）「飼料総使用量」及び「EU産原料の使用量」は2020/2021年度の数量